

けやき



No. 617
2020.10.30

京大職組
文学部支部

2020年度支部委員会発足にあたって

コロナ禍の中で大学のあり方とは・・・

新支部長あいさつ

安里 和晃

2020年9月より支部長を拝命しました安里（あさと）です。加入したばかりで支部長というのも、なかなかチャレンジングですが、新型コロナウイルス感染症により社会のあり方そのものが大きく変わっており、大学もまた、そのあり方の再考を迫られています。

特に、新型コロナウイルス感染症により、授業のあり方が大きく変わりました。学生に対する影響は甚大で、とりわけ一回生は、大学生となっても半年以上も大学に通えない状況が続きました。他方で、課題や授業準備のために費やす学習時間は一日平均3.8時間で、4人に1人が強い負担を感じています。後期も全学共通科目の多くがオンラインとなったため、キャンパスを知らない京大生の手探り状態がしばらく続きそうです。また、単位の実質化とキヤップ制のバランスを、改めて議論する必要があります。

また、こちらはあまり議論されませんが、教職員の負担も大きいものがあります。オンデマンド型授業（テキスト教材）の一コマの準備に4時間以上を費やす教員の割合は、50%近くに上ります（高等教育研究開発推進センター編、2020「オンライン授業に関するアンケート調査」結果報告（概要）（一））。



それに、教員にかかる負担は、専攻や授業形態によって千差万別でしょう。歴史的な文献をオンラインでどうあつかうか。実習やフィールドワークをどう実施するのか。教員の試行錯誤が続いています。さらに、コロナ禍における職員の労働実態については、学生や教員と比べると可視化が遅れていて、その問題点も明らかにする必要があります。

コロナ禍においては社会全体に統制の動きが出るため、より権力のあり方が問われる時期でもあります。日本学術会議の件では、恣意的ともとれる権力の介入が見られました。確かに、日本学術会議においては、年齢構成やジェンダーについての課題があると思いますが、人事に関する介入は不透明なままです。これは、同会議だけの問題ではありません。官僚に対する人事権の集権化の動きや大学総長の選考過程も同様でしょう。

コロナ禍だけではなく、人口減少社会、つまり財政緊縮社会においては、人々の自由と予算の再分配をめぐる交渉が不断に、かつより厳しく行われるようになりそうです。再分配をつかさどる政権が、予算削減を盾に権力を行使しやすくなり、より強い交渉力を発揮するようになりそうです。たてつくと、予算は容易に削減されるでしょう。交渉力を抑制された我々がどうやって交渉するのか。これは従来に増して大きな課題となっています。

幸いなことに、文学部においては文学研究科と文学部支部との間に、十分なコミュニケーションと協力関係が構築されていると聞いています。とはいえ、資源が限られている中で、どのような活動を実施し、よりよい職場環境をつくっていくのか、皆様からのご意見をもとに、またお知恵をいただきながら進めてまいりたいと思います。何卒ご協力のほどよろしく申し上げます。

2020年度支部委員会メンバー

支部長	安里 和晃
副支部長	丸山 里美 木土 博成
支部委員	福村 輝美 藤山 優美 似内 奏子
ピラ配布	事務支部委員全員

研究科長と事務長へのご挨拶

新支部委員会発足にあたり、今年度はコロナウイルス対策のため、9月4日にメールにて宇佐美研究科長、大野事務長にご挨拶しました。支部委員会からは、これまで通りの組合との信頼関係に基づき、必要に応じて折衝や懇談に応じていただくこと、組合との慣行事項などで変更が必要となった場合は必ず事前に相談いただくことをお願いし、お互いに今後とも協力していくことが確認されました。



今年度に新しく文学研究科に来られた方に自己紹介をお願いしました。

新人インタビュー



個人情報保護のため、
Webでは非掲載といたします。



【アンケート実施します！】



文学部支部では今年も教職員アンケートを実施します。
アンケート結果は、研究科長懇談に活かしていきますので
是非ご協力をお願いします。